

国立国語研究所学術情報リポジトリ

宮古語多良間方言の修飾構造体のプロソディー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2024-03-07 キーワード (Ja): 宮古語, 多良間方言, 修飾構造体, 階層的韻律構造, 韻律構造の再構築 キーワード (En): 作成者: 松森, 晶子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000176

宮古語多良間方言の修飾構造体のプロソディー

松森晶子

日本女子大学

要旨

本稿は、宮古語の多良間方言の韻律体系に焦点を当て、「名詞 nu 名詞 nu 名詞…」のように属格接語 nu を介して名詞がいくつか連結した構造体（以下「修飾構造体」と呼ぶ）の韻律型の調査データを公開することを主な目的とする。また本稿では、多良間方言に「主要部にアクセントの核を付与する」という規則をたてた上で、その修飾構造体に階層的な韻律構造を想定し、その規則が下位の階層から上位の階層へと循環的に適用すると考えることで、その韻律型の解釈を試みる。さらに本稿では、「名詞 1 nu 名詞 2 nu 名詞 3 nu 名詞 4」のような 4 つの要素からなる修飾構造体では韻律構造の組み換えが起こり、それが「名詞 1 nu 名詞 2 nu」と「名詞 3 nu 名詞 4」のような 2 つの大きな韻律上の固まりに分断するという仮説を提示し、そのような組み換えを「韻律構造の再構築」と呼ぶ。そして多良間方言では、上述の「主要部に核を付与する」という規則は、その 2 つの韻律上の固まりにそれぞれ適用する、という仮説を提示することによって、このような 4 つの要素からなる修飾構造体の示す韻律型を説明する試みを行う。最後に本稿では、特に A 型の語から開始する修飾構造体においては、そのピッチ変動の出現位置に、いくつかの異なるタイプのものが観察されるという記述結果を報告し、今後特に A 型の語から開始する修飾構造体に的を絞って、多良間方言の韻律体系を引き続き調査していく必要があることを論じる*。

キーワード：宮古語，多良間方言，修飾構造体，階層的韻律構造，韻律構造の再構築

1. はじめに

平山他（1967）、平山（編著）（1983）に代表される従来の琉球語の記述研究では、宮古語の諸方言には 2 つの型の区別を持つ二型アクセント体系とともに、型の区別がない一型アクセント体系、あるいは無型アクセント体系が数多く観察されると記述されていた。またその二型アクセント体系も、現在その型の区別が消滅の途上にあるとされてきた。

しかしながら松森（2010）の多良間方言の三型体系、五十嵐他（2012）の池間方言の三型体系

* 本稿は 2022 年 5 月 21 日に開催された国立国語研究所共同研究プロジェクト第 1 回合同研究会（オンライン）における筆者の発表と、その際に参加者の方々から頂戴したコメントをもとにして 2023 年 3 月に多良間島で再調査を行った結果を公表するものである。多良間方言の韻律をお教えくださった話者の方々に、篤く御礼申し上げます。また本発表で提示するデータの一部は、五十嵐陽介氏によって作成された調査票に基づいて収集された。データ使用をご許可くださった五十嵐氏に感謝いたします。さらに、草稿を詳細に読み、建設的な助言とともに、分析の進展につながる有益なアイデアをくださった二人の査読委員の方にも深く感謝いたします。なお本研究は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「日本語・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」、および JSPS 科研費 19H00530, 20H01259 の研究成果の一部である。

の発見を皮切りに、近年、明瞭な 3 種類の型の対立が見られる体系が宮古諸島に次々と発見されつつある。それに伴って、宮古語の諸方言の韻律体系の仕組み解明を目指した議論も、現在活発に展開されている。たとえば多良間方言については松森 (2014, 2016a, 2016b, 2022), 五十嵐 (2015, 2016a), 青井 (2016, 2017, 2018a, 2018b, 2019, 2022), 新田 (2018a, 2018b, 2019, 2023a), セリック (2020, 2021a, 2021b), セリック・青井 (2021a, 2021b, 2022), 池間方言については五十嵐 (2016a, 2016b, 2018), Igarashi et al. (2018), 新田 (2022), 宮古島内の諸方言については、与那覇方言の五十嵐 (2012), 松森 (2013, 2017), 新田 (2023b), 狩俣方言の松森 (2015), 上地方言の松森 (2017), Matsumori (2019), 皆愛方言のセリック (2021c) 等々の研究がそれに当たる。これら一連の研究によって、現代の宮古諸島の三型アクセント体系の仕組みには、(共通点とともに) 多くの異なりがあるという事実が徐々に明らかになってきた。

そのような動向のなか本稿では、近年の宮古語の韻律研究の中でもっとも数多くの記述が試みられてきた多良間島のアクセント体系を取り上げる (なお本稿を通してこの島の方言を「多良間方言」と呼ぶ)。そして、特に「X nu Y」や「X nu Y nu Z」のように属格接語 nu を介して名詞が連なった構造体のプロソディーに焦点を当てた記述・考察を行う。本稿では、このような構造体にはそれまでの記述では説明できないような韻律型が観察されるという五十嵐 (2015) の指摘を出発点に、さらに調査を行って得た結果を報告し、その解釈を試みる。また、特に A 型の語から開始するこのような構造体には、同じ多良間島内でも話者によって異なる韻律型が観察される、という調査結果もあわせて報告する。

2. 多良間方言の三型体系：その仕組みに関わる考察の変遷

既に述べたように、宮古語の諸方言には三型アクセント体系が現在次々と発見されつつあるが、そのような発見につながる重要な契機となったのは、「韻律語」という韻律カテゴリーの想定である。すなわち宮古語の韻律体系の仕組みの解明には、モーラやフットに加え、それらより上位の韻律カテゴリーである「韻律語」を、その単位として想定する必要があるためである。このことに関する「気づき」が、近年の宮古語の記述研究の急速な発展を促したと言えるだろう。

「韻律語」とは、2 モーラ以上の形態素 (名詞、複合語の語根、2 モーラ以上の接語、名詞+1 モーラ接語など) をもとに形成される韻律上の単位であるが、その定義の詳細については五十嵐 (2015, 2016a), Igarashi, et al. (2018), セリック (2020) 等の他の論考にゆずり、本稿では省略する。

以下、多良間方言の 3 種類の韻律型を、それぞれ A 型、B 型、C 型と呼ぶ。(1) は「～もない mai neeN」という文の中で発話してもらった場合の、これら 3 種類の韻律型を示す。なお以下本稿を通じて韻律語の境界を、たとえば (mai) のように、カッコによって示す。またピッチの高いモーラは太字体で、低いモーラは普通体で示すこととする。さらに急激なピッチ変動の出現する箇所を] と [の記号を使って表し、ピッチの下降位置には] を、ピッチの上昇位置には [を用いることとする。また以下、具体例の直前の記号 A, B, C は、当該の文節がそれぞれ A 型、B 型、C 型の語あるいは語根から開始することを示している。

(1) 多良間方言の韻律型

A	([pir])	(mai) …	ニンニクも…
B	([mami])	(ma]i) …	豆も…
C	([goor] ra)	(mai) …	苦瓜も…

多良間方言では、(1) のような文節¹では、B型は2つ目の韻律語内部、C型は1つ目の韻律語内部に急激なピッチ変動（この場合は下降）が出現する。これに対してA型には急激なピッチ変動は起こらず、文節の終わりまで、まっすぐ平坦な音調が続くとされている。

さて、この多良間方言の（三型アクセント体系としての）記述研究の初期（松森 2010, 2014, 五十嵐 2015, 2016a, 青井 2016, 2017 等の研究がそれに当たる）の段階では、この方言は「下がり目」の位置が有意味であり、したがってピッチが高い音調から低い音調へと切り替わる直前のモーラにアクセントの核（以下、これを単に「核」と呼ぶこととする）が置かれているとされていた。

(1) が典型的に示すように、その文節がイントネーション句（文節より上の韻律範疇）の開始部分に出現した場合には、多良間方言の急激な下降は、B型では2つ目の韻律語（(1) の場合は mai）の末尾から数えて2つ目のモーラ（末尾から数えて2つ目のモーラを本稿では「-2 のモーラ」と呼ぶこととする）に、C型では1つ目の韻律語（(1) の場合は goora）の -2 のモーラに出現するからである。そのため上述の初期（2010～2017年頃）の研究では、多良間方言の核は「各韻律語の -2 のモーラに置かれる」と記述されていた。

しかし松森（2016a）によって提示されたひとつの「気づき」によって、その考え方に大幅な修正が必要なことが次第に明らかになっていった。その気づきとは、多良間方言ではピッチの「下がり目」の位置だけではなく、「上がり目」の位置も有意味な場合があるという点である。

たとえば松森（2016a）が提示した、文中に4つの核を持つ次の(2) のような文の発話を検討してみよう。この文は4つの文節から成り、各文節の先頭がC型の語（あるいは語根）から成っている。文中、1番目と3番目の核の位置ではピッチの「下降」が、2番目と4番目の位置ではピッチの「上昇」が、それぞれ核の位置を示している。すなわち多良間方言では、核の置かれた位置で高い音調と低い音調が交替し、隣とはちょうど反対の音調に入れ替わる、という大変興味深い（類型的に見ても珍しい）現象が生じるのである。なお以下本稿では、(2) のように文節が連続する場合に限って、それぞれの文節境界を { } で区切って示すことがある。

¹ 本稿では「文節」を、「語彙的語根と0個以上の接語から成る単位」と形態・統語的に定義する。

(2) 多良間方言の文レベルの韻律型

{ ([kinu] u) (mai) }	{ (upusju) ([gamiu]) }	{ (jooNna) a }	{ (katamii) ([buta] L) }	²
HL	LH	HL	LH	
昨日も	海水甕を	ゆっくり (やさしく)	担いで運んでいた。	

本稿では以下、「高い音調」をH音調, 「低い音調」をL音調と呼ぶことにする。そうするとこの方言では, ひとつのイントネーション句内部の核の置かれた各箇所, H音調はL音調に, L音調はH音調に切り替わることになる。

青井 (2018a) は, このような多良間方言の音調の交替について, そのピッチ上昇の位置は, ピッチ下降が予測される位置より, 1 モーラ分右に出現することを検討・確認した。たとえば次の (3a) に見られるように, C型の語 zimami (ピーナツ) からはじまる文節は, それがイントネーション句の冒頭にある場合には, 当該の語の -2 のモーラ (すなわち zimami の ma のモーラ) 直後でH音調からL音調に切り替わる。これに対し (3b) のように, 同じ語がイントネーション句の2つ目の文節に出現し, かつ直前の文節がL音調で終わる場合には, 当該の語の直後のモーラ (すなわち Msju (味噌) の第1モーラ) からL音調がH音調に切り替わる。なお, 以下本稿を通じて, 核を * という記号によって示すことがある。

(3) 多良間方言の核に付与される「低」音調

- a. { ([zima] mi*) (Msju) (mai) } … ピーナツ味噌も…
- b. { ([wa] a*) (Msju) (mai) } { (zimami*) ([Msju] (mai)) } …
豚味噌も ピーナツ味噌も…

同様に次の (4a) に見られるように, B型の語 avva (油) からはじまる文節がイントネーション句の冒頭に出現する場合には, 当該の文節の2つ目の韻律語の -2 のモーラ (すなわちこの場合は Msju (味噌) のMのモーラ) 直後で, ピッチがH音調からL音調へと切り替わる。これに対し (4b) に見られるように, それがイントネーション句の2つ目の文節に出現し, かつ直前の文節がL音調で終わる場合には, そのL音調が当該の語の直後のモーラ (この場合は mai の第1モーラ) からH音調に切り替わる。

(4) 多良間方言の核に付与される「低」音調

- a. { ([avva] (M) sju*) (mai) } … 油味噌も…
- b. { ([wa] a*) (Msju) (mai) } { (avva) (Msju*) ([mai]) } …
豚味噌も 油味噌も…

² ここでは接続形 katamii- と補助動詞 butaL がまとまって単一の文節を形成すると想定してある。しかし韻律上は, 両者はそれぞれ別の単位を形成すると考えることも可能である。この点に関する考察と記述は, 今後の課題としたい。

以上のような観察と考察をもとにして、青井 (2018a), および新田 (2018a, 2018b, 2019) によって、多良間方言の核についての大幅な修正案が提示されるに至った。その結果、この方言の核は、その初期の記述研究が考えていたようなピッチの「下がり目」の出現するモーラに置かれるのではなく、L 音調が出現するモーラに置かれる（すなわち多良間方言の核は、韻律語の -2 のモーラではなく、韻律語の末尾モーラに置かれる）という考え方に切り替わった。さらに青井 (2019) 以降、その韻律語の末尾モーラに指定された核には L 音調が指定される、という考え方が確立することになった。

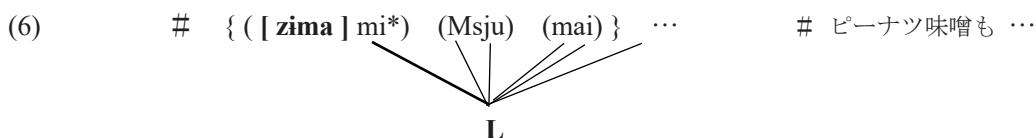
以上、2016～2019 年頃にかけて成された「気づき」と、それに伴う「発想の転換」が、多良間方言のアクセントの仕組みについての考察に大幅な変革をもたらしたことを述べてきた。本稿では、これら先行研究の研究成果を踏まえながら、以下の議論を行っていくこととする。

すなわち、多良間方言の H 音調と L 音調の出現がどのような規則によって導き出されるかという点について、これまでに判明したことを簡略的にまとめると、次のようになる。

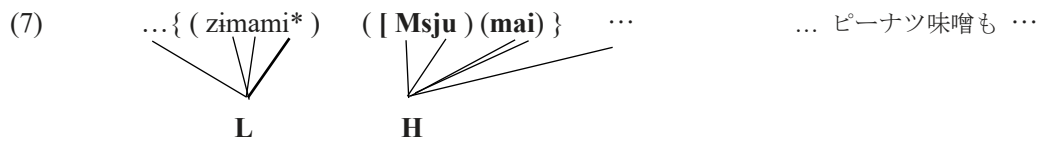
(5) 多良間方言の韻律型を導き出す規則

- a. アクセントの核 (*) は、韻律語の最終モーラに置かれる。
- b. それぞれの核 (*) には L 音調が結びつく。
- c. イントネーション句は H 音調で開始する。
- d. その H 音調は、核 (*) の位置の直前のモーラまで拡張する。
- e. 核 (*) の置かれたモーラで、L 音調に切り替わる。
- f. その L 音調は、次の核 (*) の位置まで拡張する。
- g. 核 (*) の直後のモーラで、H 音調に切り替わる。
- h. その H 音調を、次の核 (*) の位置まで拡張する。 (e. に戻って繰り返す。)

この (5) によれば、まずイントネーション句の開始部分にある文節には、次のように核の置かれたモーラに L 音調が結びついた後、その L 音調が右方向へと拡張し、その結果、最終的に ([zima] mi*) (msju) (mai) のような韻律型が出現する。



これに対しその文節がイントネーション句の中間にあり、さらに直前の文節が低く終わる場合には、次のようにその直前の文節から引き継いだ L 音調が核の置かれたモーラの位置まで拡張し、その核の直後のモーラで H 音調に切り替わる。さらにその H 音調も、次の核 (*) にぶつかるまで、右方向へ拡張していく。



ここで、これまでに明らかにされてきた多良間方言の韻律特徴を簡条書きにしてまとめると、次のようになるだろう。

(8) 多良間方言の韻律上の仕組み（これまでの記述研究の要点）

- a. 明瞭な三型体系である（3種類の型の区別を持つ）³。
- b. 核（*）の位置の計算に用いられる単位は（モーラに加えて）韻律語である。
- c. A型は、核（*）を持たない型である。
- d. B型には2つめの韻律語に核（*）が、C型は1つ目の韻律語に核（*）が置かれる。
- e. 核（*）が結びつくのはL音調である。

以上のような記述研究の成果を前提にしながら、本稿では、多良間方言の韻律の仕組みについてのさらなる分析・考察を行うことにしたい。その考察の出発点とするのは、五十嵐（2015）によって問題提起が成された「X nu Y 構造体」、「X nu Y nu Z 構造体」の示す韻律型である。

3. 多良間方言の修飾構造体の韻律型—その特徴

3.1 五十嵐（2015）による問題提起

五十嵐（2015）は、多良間方言では属格接語 nu を内部に含む（9）のような構造体において、それまで記述・観察されてこなかったような「特異な」韻律型が見られることを指摘した。以下は、五十嵐（2015:36）から引用した韻律型の一例である。なお以下本稿を通じて、具体例を出す際には、属格接語 nu に下線を引いて示すこととする。

(9) 多良間方言の韻律型—五十嵐（2015: 36）の例

- a. A ([pir nu] (pa] a) (mai) ... ニンニクの葉も...
- b. B ([mami nu] (pa] a) (mai) ... 豆の葉も...
- c. C ([tamana] nu) (paa) ([mai) ... キャベツの葉も...

この節では、五十嵐（2015）にしたがい、このような韻律型を示す構造を、仮に「X nu Y 構造体」と呼ぶこととする。

³ ただし、多良間方言は「四型」体系であることを指摘した研究（セリック 2021）もあるが、紙面の都合上、その詳細については本稿では立ち入れない。

まず (9a, b) を見てみると、A 型と B 型の語から始まる X nu Y 構造体には、どちらにもその 2 つ目の韻律語、すなわち属格接語 nu 直後の韻律語 ((9) の場合は paa の部分) に、急激なピッチ変動 (この場合は下降) が出現している。したがってこのような条件下では、A 型と B 型の韻律型が中和する。

これに対して C 型の語から開始する X nu Y 構造体 (9c) では、急激なピッチ変動を伴う箇所が 2 か所出現する。そのうちの一つ目のもの (この場合は下降) は、最初の韻律語 ((9c) の場合は tamana nu の部分) に出現し、二つ目のもの (この場合は上昇) は、その構造体の最後の韻律語 ((9c) の場合は mai の部分) の直前に出現する。その結果 (9c) では、最後の韻律語全体が高いピッチで実現していることが分かる。

さて、(9a, b) の 2 つ目の韻律語である「paa 葉」の内部に出現するピッチ変動 (この場合は「下降」) は、X nu Y 構造体の Y の本来持つ韻律特徴がそこに出現したために生じたのではない。(9) の Y に当たる語「paa 葉」は A 型の語であり ([paa mai… 葉も～)、(8c) に記述したように、そもそも A 型は核 (*) を持たず、したがって A 型の語からはじまる文節内部にはピッチ変動が起こらないはずだからである。それにも関わらず、この X nu Y 構造体では、Y の部分にピッチ変動が生じている。

実は五十嵐 (2015: 36) の指摘にもあるように、Y の本来持っている韻律特徴は、X nu Y 構造体の韻律型の決定には関与しない。このことは次の (10) の例が示している。この場合の Y に当たる語のうち「家 (小屋)」は B 型 ([jaa ma]i… 家も～)、「音」は C 型である ([u]tu mai… 音も～) である。しかしながら (10a) も (10b) も、その A 型、B 型、C 型の語から開始する X nu Y 構造体の韻律型は、それぞれ (9) の A 型、B 型、C 型のそれとまったく同じ韻律型で出現している。この (10) の例からも、その A 型と B 型にはそれぞれ当該の構造体の 2 つ目の韻律語内部に下降が生じている一方で、C 型にはまず最初の韻律語内部に下降が生じ、その後、その構造体の最後の韻律語全体が H 音調となって実現していることが見て取れる。

(10) 多良間方言の韻律型—五十嵐 (2015: 36) の例

a.	A	([usi <u>nu</u>)	([ja] a)	(mai) …	牛の小屋も…
	B	([miduM <u>nu</u>)	([ja] a)	(mai) …	女の家も…
	C	([nuuma] <u>nu</u>)	(jaa)	([mai) …	馬の小屋も…
b.	A	([kadi <u>nu</u>)	([u] tu)	(mai) …	風の音も…
	B	([ami <u>nu</u>)	([u] tu)	(mai) …	雨の音も…
	C	([funi] <u>nu</u>)	(utu)	([mai) …	舟の音も…

これらの例から、X nu Y 構造体の A 型、B 型、C 型の韻律型の決定には、Y の本来持つ韻律型は影響を及ぼさない⁴ことが明らかである。

⁴ ただしセリック (2020: 142) には、Y が複合語、あるいは 2 つの韻律語から成る語である場合には、Y のアクセントがそのまま実現するという記述報告がある。

以上見てきた (9) と (10) のような X nu Y 構造体の韻律型については、次のような疑問が生じる。まずその A 型と B 型の Y の部分（「paa 葉, jaa 家, utu 音」の部分）に、なぜピッチ変動（これら (9) と (10) の場合には「下降」）が生じるのか。また C 型の最後の韻律語の直前に上昇が見られる（最後の韻律語全体が H 音調になっている）のはなぜなのか。これらの点については、たとえば本稿の (5) や (8) にまとめられたような、語や文節レベルの韻律型に基づいて成されてきた一般化では説明できない。

さて、以上見てきた X nu Y 構造体の例では、A 型と B 型の韻律型は中和していた。しかし、このような中和は常に生じるとは限らない。以下の (11) は五十嵐 (2015) から抜粋した X が 2 つの語根から形成されている複合語の場合の X nu Y 構造体だが、このような場合には A 型と B 型の韻律型は中和していないことが分かる。

(11) 多良間方言の韻律型—五十嵐 (2015: 37) の例

- | | | | | | | |
|----|---|------------|----------------------|-------------|-------------|-----------|
| a. | A | ([guma]) | (Msju <u>nu</u>) | (ka] da) | (mai) … | 胡麻味噌の匂いも… |
| b. | B | ([avva]) | (Msju] <u>nu</u>) | (kada) | ([mai) … | 油味噌の匂いも… |
| c. | C | ([wa] a) | (Msju <u>nu</u>) | (kada) | ([mai) … | 豚味噌の匂いも… |

B 型の語根から開始する X nu Y 構造体には、複合語の後部要素を含む韻律語内（この場合は「Msju nu 味噌の」の部分）に下降が出現しているのに対して、A 型の語根から始まる場合には、属格接語 nu の直後、すなわち 3 つ目の韻律語である「kada 匂い」の内部に下降が生じるからである。したがってこのような場合には、A 型、B 型、C 型の 3 種の韻律型は明瞭に区別される。

(11) を見ると、その最後の韻律語（この場合は mai の部分）に出現する H 音調は、C 型だけでなく、B 型にも生じていることが分かる。この場合 B 型と C 型は、その構造体内部のピッチ変動がどこに生じるかによって区別される。すでに (8d) には、B 型は文節の 2 つ目 の韻律語、C 型は 1 つ目 の韻律語に、それぞれ核 (*) が置かれる、と記述されている。したがって (11b) と (11c) の下降位置の違いは、それぞれの最初の語（この場合は「avva 油」と「waa 豚」）の本来持っている語彙的な特徴によってもたらされたものであることが分かる。

これらに対し、(11a) の A 型の語（この場合は「guma 胡麻」）からはじまる X nu Y 構造体内部にピッチ変動（この場合は下降）がなぜ生じるのかは、五十嵐 (2015) までの記述研究では説明できなかった。この例では、その 3 つ目の韻律語（この場合は「kada 匂い」の部分）にピッチ変動（この場合は下降）が出現しているのだが、(8c) の記述によれば A 型はそもそも核 (*) を持たない語なので、この (11a) に見られるような下降がここに出現する理由はない。

さらに五十嵐 (2015) は、属格接語 nu を内部に 2 つ持つ構造体（これを五十嵐 (2015) は「X nu Y nu Z 構造体」と呼んでいる）には、次のような韻律型が出現することを報告している。

(12) 多良間方言の韻律型—五十嵐 (2015: 39) の例

- | | | | | | | |
|---|------------|-------------------|-------------------|--------------|-----------|------------|
| A | ([kuba]) | (gii <u>nu</u>) | (paa <u>nu</u>) | (paN] ta) | (mai) … | クバ木の葉の先端も… |
|---|------------|-------------------|-------------------|--------------|-----------|------------|

B	([mami]) (gii] nu) (paa nu) (paNta)	([mai]) …	豆木の葉の先端も…
C	([ada] N) (gii nu) (paa nu) (paNta)	([mai]) …	アダン木の葉の先端も…

(11)と同様、この(12)でも、C型だけでなくB型にもその構造体の最後の韻律語（この場合は mai）全体が、高く実現していることが分かる。またこの場合A型の語から開始する X nu Y nu Z 構造体には、その頭から数えて4つ目の韻律語（この場合は paNta の部分）に下降が生じている⁵が、このピッチ変動（下降）が一体なぜ生じるのかも、前述の(5)や(8)のような記述では説明がつかない。

以上述べてきたように五十嵐(2015)は、属格接語 nu を含む構造体の韻律型についての問題提起を行い、それまでの記述では説明ができない多良間方言のこれらの構造体の韻律型について、今後さらにデータを蓄積した上で、詳細に検討する必要があることを論じた。本稿ではこの五十嵐(2015)の問題提起を受けて、このような属格接語 nu を内部に持つ構造体の韻律型に焦点を当てて記述・考察する。

なお本稿では以下、五十嵐(2015)が「X nu Y 構造体」や「X nu Y nu Z 構造体」と呼んだ構造体を、セリック・青井(2021)の用語を採用して「修飾構造体」⁶と名付けて議論を行うこととしたい。

3.2 「修飾構造体」の韻律型記述のこれまで

まず前節の(11)で見たような、複合語から開始する修飾構造体について検討してみよう。次の例は筆者のこれまでの多良間方言の調査によって得られた、複合語から開始する修飾構造体の例である（なお例文中の nii は具格、Nkee は向格を示す接語である）。(11)で見たのと同様、この場合も、それぞれの修飾構造体の先頭の語（この場合は複合語の前部要素）の本来持っている語彙的な特徴の違いによって、3種類の異なる韻律型が明瞭に区別されていることが分かる。また(11)と同様、これらの例でも、最後の韻律語（この場合は mai, nii, Nkee の kee の部分）に出現する H 音調は、C型だけでなく、B型にも生じていることが分かる。これらの例から、多良間方言の複合語から始まる修飾構造体においては、五十嵐(2015)が提示した(11)に挙げたような韻律型が、ごく一般的に見られることが確認できる。

⁵ この下降は、「paNta 先端」という語が本来持っている韻律特徴がここに出現したために生じたのではない。なぜなら paNta（先端・頂上）はA型の語であり（[paNta mai] …, 渡久山・セリック(2020:387)）、したがって文節内部にピッチ変動が起こらないはずの語だからである。

⁶ そもそも「修飾構造体」という名称がセリック・青井(2021)において導入されたのは、「X nu Y 構造体」に観察されるのと同様な現象が、（たとえば「泣く夫」や「決めない夫」のような）連体構造体においても見られることをセリック 2020 が指摘したことに端を発する。そのため、「X nu Y 構造体」や「X nu Y nu Z 構造体」という名称の代わりに、それらの構造体をも含んだより包括的な概念である「修飾構造体」へと、名称の転換が図られることになったのである。なお、本稿ではその修飾構造体のうち、「X nu Y」や「X nu Y nu Z」のように属格接語 nu を介して名詞が連なったものだけを扱う。他の修飾構造体の記述・考察については、今後の課題としたい。

(13) 多良間方言の修飾構造体の韻律型

- | | | | | | | |
|----|---|-----------------|--------------------|---------------|-------------|---------------|
| a. | A | ([jaroo) | (gii nu) | (pa] a) | (mai) … | テリハボク木の葉も… |
| | B | ([nemuri) | (gii nu) | (paa) | ([mai) … | ギンネム木の葉も… |
| | C | ([gazi] ma) | (gii nu) | (paa) | ([mai) … | ガジュマル木の葉も… |
| b. | A | ([pisara) | (pitu nu) | (fu] ni) | (mai) … | 平良 (の) 人の舟も… |
| | B | ([jamatu) | (pitu nu) | (funi) | ([mai) … | 大和 (の) 人の舟も… |
| | C | ([tara] ma) | (pitu nu) | (funi) | ([mai) … | 多良間 (の) 人の舟も… |
| c. | A | ([kuba) | (gii nu) | (pa] a) | (nii) … | クバ木の葉で… |
| | B | ([mami) | (gii nu) | (paa) | ([nii) … | 豆木の葉で… |
| | C | ([ada] N) | (gii nu) | (paa) | ([nii) … | アダン木の葉で… |
| d. | A | ([mizi) | (gami nu) | (waabi] N) | (kee) … | 水甕の上へ… |
| | B | ([miM) | (gami nu) | (waabi N) | ([kee) … | 耳甕の上へ… |
| | C | ([upu] sju) | (gami nu) | (waabi N) | ([kee) … | 海水用甕の上へ… |

これに対し修飾構造体ではない文節には、上述のような韻律型は観察されない。次の多良間方言の例は、2つ、あるいは3つの語根から成る複合語に2モーラ以上の接語が後続した文節の韻律型を示している（なお例文中の *kara* は奪格を示す接語である）。これらはすべて修飾構造体ではないので、その文節内部に韻律語がいくつ連続しようとも、A型の文節内にピッチ変動（この場合は下降）が出現することはない。またB型やC型から開始する文節内の最後の韻律語全体が高く実現することもない。

(14) 多良間方言の修飾構造体ではない文節の韻律型

- | | | | | | | |
|----|---|-----------------|--------------------|-----------------|-------------------|-------------|
| a. | A | ([jaroo) | (gii) | (mai) … | テリハボク木も… | |
| | B | ([nemuri) | (gi] i) | (mai) … | ギンネム木も… | |
| | C | ([gazi] ma) | (gii) | (mai) … | ガジュマル木も… | |
| b. | A | ([mizi) | (gami) | (mai) … | 水甕も… | |
| | B | ([miM) | (ga] mi) | (mai) … | 耳甕も… | |
| | C | ([upu] sju) | (gami) | (mai) … | 海水用甕も… | |
| c. | A | ([guma) | (guru) | (jama) | (mai) … | 胡麻殻の山も… |
| | B | ([mugi) | (gu] ru) | (jama) | (mai) … | 麦殻の山も… |
| | C | ([jusi] ki) | (guru) | (jama) | (mai) … | ススキ殻の山も… |
| d. | A | ([aka) | (mami) | (baru) | (kara) … | 小豆畑から… |
| | B | ([oo) | (ma] mi) | (baru) | (kara) … | 緑豆畑から… |
| | C | ([tara] ma) | (mami) | (baru) | (kara) … | 多良間豆畑から… |
| e. | A | ([jaroo) | (gii) | (jama) | (mai) … | テリハボク木の茂みも… |
| | B | ([nemuri) | (gi] i) | (jama) | (mai) … | ギンネム木の茂みも… |

C ([gazi] ma)(gii) (jama) (mai) … ガジュマル木の茂みも…

たとえば (14e) の A 型の ([jaroo] (gii) (jama)(mai)… では、文節の最初から最後まで H 音調が連続し、(9) ~ (13) に挙げた修飾構造体の A 型に観察されるようなピッチの下降が、その文節内部に出現することはない。また (14e) の C 型の ([gazi]ma)(gii)(jama)(mai)… という文節は、その文節末の韻律語のピッチが低く終わり、それが上昇して ×([gazi]ma)(gii)(jama)([mai)… のようになることはない（以下本稿を通じて、「このような韻律型はその出現が観察されていない」ということを示す際には、当該の韻律型の左肩上に × の記号を付けて示すこととする）。すなわち多良間方言では、(11) ~ (13) に挙げた韻律型の B 型や C 型に観察されるような修飾構造体の最後に出現する H 音調は、修飾構造体ではない (14) のような文節には生じないのである。

以上のような事実を説明するために青井 (2018a)、セリック・青井 (2021) は、多良間方言には、修飾構造体において新たに核を生じさせるような規則が存在すると提案した。すなわち多良間方言では、修飾構造体 (X nu Y 構造体) においては Y の本来の音調が削除され、その Y を含む韻律語に新しく核が付与されると考えたのである（この規則を、以下本稿では「(X nu)(Y*) 規則」と呼ぶ）。次はその規則を提案した青井 (2018a) からの引用である。

(15) X nu Y をドメインとして適用される 2 つの規則 (青井 2018a: 20)

- a. 語根 Y のアクセント型を削除する。
- b. 語根 Y を含む韻律語の語末モーラに「アクセント核」を付与する。

しかしこの (X nu)(Y*) 規則は、(12) や (13) に挙げられたような「X nu Y nu Z 構造体」の韻律型を説明するためには、修正が必要となる。ここで再度 (12) の例を以下に挙げる。

(12) 多良間方言の修飾構造体の韻律型—五十嵐 (2015: 39) の例

- a. A ([kuba) (gii nu) (paa nu) (paN] ta) (mai) … クバ木の葉の先端も…
- b. B ([mami) (gii | nu) (paa nu) (paN]ta) ([mai) … 豆木の葉の先端も…
- c. C ([ada] N) (gii nu) (paa nu) (paN]ta) ([mai) … アダン木の葉の先端も…

もし (12) の構造に、属格接語 nu が出現するたびに (15) の (X nu)(Y*) 規則が循環的に適用されたとすれば、それぞれの型から始まる構造体は、最終的には次のような韻律型になることが予測される。

(16) (X nu)(Y*) 規則 (15) が循環的に適用したと想定した場合の韻律型

- A × ([kuba) (gii nu) (paa] nu*) (paN] ta*) ([mai) …
- B × ([mami) (gii] nu*) (paa nu*) ([paN]ta*) (mai) …
- C × ([ada] N*) (gii nu) (paa nu*) ([paN]ta*) (mai) …

しかしこのような韻律型は（少なくとも現時点では）報告されていない。

(12) に挙げられたような韻律型を正しく導き出すためには、たとえば句頭から 3 つ目の韻律語（この場合は、*paa nu* の部分）に付与された核を無効化する、というような特殊な処理が必要となってしまう。しかし、そのような処理（無効化）がなぜ必要となるのかについて、(X nu)(Y*) 規則を想定する説は、説得力ある説明を与えることはできない。

(12) のような構造体では、内部に属格接語 *nu* がいくつ重なっても、その構造体の末尾の韻律語直前に、急激なピッチ変動（A 型の場合には下降、B 型と C 型の場合には上昇）が出現している。すなわち (15) の規則は、「X nu Y nu Z 構造体」の最終の韻律語（すなわち Z）にしか適用しない、と考えなければならないことになる。

このような事実を説明するために青井（2022）は、(X nu)(Y*) 規則をあらため、「主要部に新たに核を付与する」という規則を提案した。実は「主要部に新たに核を付与する」という提案は、新田（2019）によってもすでに成されている⁷。本稿ではこれらの先行研究の提案を受けて、これを「主要部核付与規則」と呼び、次のように規則化する。本稿では、この (17) のような規則が多良間方言に存在していることを前提に⁸、以下の議論を続けることとする。

(17) 主要部核付与規則

修飾構造体（X nu Y, X nu Y nu Z 等）においては、その主要部（あるいは主要部を含む韻律語）に核（*）を付与せよ。

この規則によって、X nu Y の場合には Y に、X nu Y nu Z の場合には Z に、あらたに核が発生することになる。またそのように解釈することによって、(16) に示されたような韻律型が出現しないことも正しく予測される。

さて、一見したところ、(17) の主要部核付与規則によって修飾構造体の韻律型がすべて説明で

⁷ 新田（2019）はこの「主要部に核を置く」という現象について、これは「名詞句終端を示す機能の現れである」という説明を与えている。

⁸ 本稿では、仮にこの主要部核付与説を採用し、以下それを前提とした議論を行うこととするが、この仮説が説得力を持つためには、この「主要部に核を付与する」という現象が、はたして他の宮古語諸方言にも広く観察されるのか、ひいては日琉語の他の体系あるいは他の言語にも一般的に見られるのか、というような類型的視点からの検討が必要となるであろう。

ちなみに筆者の調査した与那覇方言では修飾構造体の 3 種類の型の韻律型は次のように実現し、主要部にあらたな核が出現するということはない。以下のデータでは、(A 型の一部を除いて) その主要部の「*suba* 側」や「*pari* 畑」の部分にプロミネンスは生じていないことに注目してほしい。

[与那覇方言の修飾構造体の韻律型]

a.	A	[<i>usi nu</i>]	<i>jaa nu</i>	[<i>suba N</i>]	<i>keedu</i> ...	牛の小屋の側へ...
	B	<i>midumu nu</i>	[<i>jaa nu</i>]	<i>suba N</i>	<i>keedu</i> ...	女の家側へ...
	C	<i>ja[rabi nu]</i>	<i>jaa nu</i>	<i>suba N</i>	<i>keedu</i> ...	子供の家側へ...
b.	A	[<i>usi nu</i>]	<i>jaa nu</i>	[<i>suba nu</i>]	<i>pari N keedu</i> ...	牛の小屋の側の畑へ...
	B	<i>midumu nu</i>	[<i>jaa nu</i>]	<i>suba nu</i>	<i>pari N keedu</i> ...	女の家側の畑へ...
	C	<i>ja[rabi nu]</i>	<i>jaa nu</i>	<i>suba nu</i>	<i>pari N keedu</i> ...	子供の家側の畑へ...

「主要部に核を付与する」という規則の自然性と妥当性については、(多良間方言以外のデータによる)さらなる裏付けが求められているが、これは今後の課題としたい。

きるかのように思われる。たとえば (12a) の ([kuba)(gii nu)(paa nu)(paN]ta)(mai)… の4つ目の韻律語 (paNta の部分)になぜピッチの下降が生じるのかが、この規則によってまず説明できる。同時にこの規則の想定によって、(12b) の ([mami)(gii nu)(paa nu)(paNta)([mai)… や (12c) の ([ada]N)(gii nu)(paa nu)(paNta)([mai)… 等の最後の韻律語 (この場合は mai の部分) の直前に、なぜピッチの上昇が生じるのかも説明できる。これらのピッチ変動 (A 型のピッチ下降と B 型、C 型のピッチ上昇) は、すべて (17) の主要部核付与規則によって、当該の構造の主要部である paNta の部分にあらたに核が付与されたために起こった、と説明することが可能だからである。

しかしながら筆者のこれまで得られた多良間方言の調査データの中には、上述の主要部核付与規則 (17) では説明することができないような韻律型も観察されている。次に示した韻律型のうちの (18a) は、その典型的な例である。

(18) 多良間方言の修飾構造体の韻律型

- a. A ([jaroo nu) (paa] nu) (sjaki) ([kara)… テリハボクの葉の先から…
- b. B ([mami nu) (paa] nu) (sjaki) ([kara)… 豆の葉の先から…
- c. C ([adaN] nu) (paa nu) (sjaki) ([kara)… アダンの葉の先から…

このうちの (18a) を見ると、A 型の語から開始する構造体に生じる最初のピッチ変動 (この場合は下降) は、その主要部 (この場合は「sjaki 先」) ではなく、その直前の韻律語 (この場合は「paa nu 葉の」の部分) に出現していることが分かる。このことは、このピッチ変動 (下降) の出現位置は、かならずしも主要部に限定されているとは限らないことを示唆している。

さらに (18) の例の中では、B 型や C 型だけでなく A 型においても、その最後の韻律語 (この場合は「kara 奪格接語」の部分) 全体のピッチが高くなっていることが注目される。すなわち、修飾構造体の最後の韻律語に現れる H 音調の出現は、けっして B 型や C 型に限られているわけではないことも、(18) の例は示唆している。

さらに筆者の集めた「X nu Y nu Z」の構造体のデータの中には、A 型に限って 2 種類の韻律型が出現する、というケースが見られた。まず (19) はすべて、五十嵐 (2015: 39) が示した (12) の例と同じような韻律型を示している例である。

(19) 多良間方言の修飾構造体の韻律型

- a. A ([kuba) (gii nu) (paa nu) (paNta] N)(kee)… クバ木の葉の先端に…
- A ([jaroo) (gii nu) (paa nu) (paNta] N)(kee)… テリハボク木の葉の先端に…
- b. B ([mami) (gii nu) (paa nu) (paNta N)([kee)… 豆木の葉の先端に…
- B ([mm) (gii nu) (paa nu) (paNta N)([kee)… 芋木の葉の先端に…
- c. C ([ju] na) (gii nu) (paa nu) (paNta N)([kee)… ユウナ木の葉の先端に…
- C ([funu] u) (gii nu) (paa nu) (paNta N)([kee)… ミカン木の葉の先端に…

ところがこのうちの A 型については、(19a) に示した韻律型のほかに、次のような韻律型も、同じ話者の発話に観察されていたのである。

(20) 多良間方言の修飾構造体の韻律型 (A 型から開始する修飾構造体において)

- A ([kuba] (gii nu) (paa nu) (paNta N) ([kee])… クバ木の葉の先端に…
A ([jaroo] (gii nu) (paa nu) (paNta N) ([kee])… テリハボク木の葉の先端に…

上述の (18a) の場合と同様、(20) の例においても、そこに生じている最初のピッチ変動（この場合は下降）の出現位置は、その主要部（この場合は paNta）ではない。それは主要部の直前にある韻律語（この場合は「paa nu 葉の」の部分）にある。「paa 葉」は (20) の構造体の主要部ではないので、(20) に下降が出現する理由は、(17) の主要部核付与規則では説明することができない。そして (20) の例でも、(A 型から開始する構造体であるにも関わらず) その最後の韻律語（この場合は kee の部分）全体のピッチが、高く実現していることが分かる。

以上のように修飾構造体には、先行研究の記述だけでは説明がつかないような韻律型が出現することが、筆者のこれまでの調査で分かっていた。また、果たして (17) の主要部核付与規則を想定するだけで修飾構造体のすべてのピッチ変動（下降と上昇）を説明できるかについては、十分な検討が必要であるとも思われた。そのためには修飾構造体（とりわけ属格接語 nu でつながる名詞が 3 つ以上の場合）の韻律型の具体例を、できる限り数多く集めて分析を行う必要がある。

以上のような目的を遂行するために、2023 年 3 月末に、多良間島にてあらためて調査を実施した。次節はその調査結果の報告である。

なお以下の節からは、属格接語 nu でつながる名詞が 2 つある修飾構造体を「名詞 1 nu 名詞 2」構造体、3 つの場合を「名詞 1 nu 名詞 2 nu 名詞 3」構造体、4 つの場合を「名詞 1 nu 名詞 2 nu 名詞 3 nu 名詞 4」構造体と呼ぶことにする。

4. 修飾構造体の調査結果報告およびそれらの韻律型を説明するための仮説

本稿のための調査は、特に (18) のような属格接語 nu でつながる名詞を 2 つ以上その内部に含む修飾構造体の韻律型を集めることを主眼にして行われた⁹。紙面の都合上、以下本稿では、調査したすべての韻律型を載せるのではなく、各型からそれぞれ 3 語¹⁰ずつ選び、それらを先頭に持ってきた場合の韻律型を代表させて示すことにする。代表とした語は、A 型は kuusju (唐辛子)、

⁹ 修飾構造体を含む文を発話していただいた本調査の協力者 A 氏は、多良間島仲筋出身の昭和 28 年 (1953 年) 生まれの男性である。16 歳から約 20 年間の東京での在住歴があるが、それ以外を多良間島内で過ごしている。そのほか、本稿で扱った単純語の所属型の確認には、B 氏 (昭和 16 年 (1941 年) 生まれ、男性) と C 氏 (昭和 18 年 (1943 年) 生まれ、女性) にもご協力いただいた。

¹⁰ これらの語の所属する韻律型の確認は、すべて mai という接語を後続させ「～もない～mai neen」という文を発話してもらった際の韻律型の観察に基づいて行った。A 型については [kuusju mai]… (唐辛子も)、[guma mai]… (胡麻も)、[akana mai]… (紫蘇も)、B 型については [mami ma] i… (豆も)、[mugi ma] i… (麦も)、[tamana ma] i… (キャベツも)、C 型については [sibu]L mai… (冬瓜も)、[buu]gi mai… (砂糖黍も)、[upu]ni mai… (大根も) のような韻律型が確認されている。

guma (胡麻), akana (紫蘇), B型は mami (豆), mugi (麦), tamana (キャベツ)¹¹, C型は sibuL (冬瓜), buugi (砂糖黍), upuni (大根) である¹²。

4.1 「名詞 1 nu 名詞 2」構造体の検討

まず「名詞 1 nu 名詞 2」構造体を調査した結果, 次の (21) に示すような韻律型が観察された。これは, 「~の畑もない ~nu paru mai neeN」という文の ~ の部分に A 型, B 型, C 型の語を入れて発話してもらった場合の韻律型である。

(21) 多良間方言の修飾構造体の韻律型

- | | | | | | |
|----|---|--------------------------|-------------|------------|---------|
| a. | A | ([<u>kuusju nu</u>]) | (pa] ru) | (mai)… | 唐辛子の畑も… |
| b. | B | ([<u>mugi nu</u>]) | (pa] ru) | (mai)… | 麦の畑も… |
| c. | C | ([<u>sibuL nu</u>]) | (paru) | ([mai]… | 冬瓜の畑も… |

ここでは A 型と B 型の語から開始する修飾構造体内部には下降が出現し, C 型の語からはじまる修飾構造体には, その最後の韻律語が H 音調で実現していることが分かる。すなわちこれらの例には, 五十嵐 (2015) が記述した通りの韻律型の出現が確認された。

同様に (22) は「~の畑へ行こう ~nu paru Nkee ika」という文中における A 型, B 型, C 型の韻律型である。これらの韻律型も, 五十嵐 (2015) の記述の予測するところと一致する。

(22) 多良間方言の修飾構造体の韻律型

- | | | | | | |
|----|---|--------------------------|--------------|------------|----------|
| a. | A | ([<u>akana nu</u>]) | (paru] N) | (kee)… | 紫蘇の畑に… |
| b. | B | ([<u>tamana nu</u>]) | (paru] N) | (kee)… | キャベツの畑に… |
| c. | C | ([<u>upuni nu</u>]) | (paru N) | ([kee]… | 大根の畑に… |

ちなみにこの (21), (22) の韻律型は, すべて (17) に示した主要部核付与規則を想定するだけで, 説明が可能である。A 型と B 型から開始する修飾構造体内部に出現している下降も, C 型の修飾構造体の最後の韻律語の H 音調も, すべて主要部を含む韻律語 ((21) の場合は (paru), (22) の場合は (paru N) の部分) に, あらたに核が付与されることによって出現したと捉えることが可能だからである。

さて (21c) と (22c) から分かるように, C 型の語から開始する修飾構造体の文節は, 最後の韻

¹¹ この tamana (キャベツ) という語は (9) に挙げた五十嵐 (2015: 36) の例では C 型となっているが, 本調査の話者はこの語を B 型の語として発音した。このように所属型が話者によって食い違いを見せることから見て, この tamana という語は新しく借用された語の一つである可能性が高い。

¹² 本調査ではこれら 9 語以外にも, A 型の sjaniN (月桃), uuvvuL (瓜), piL (ニンニク), B 型の siMna (ネギ), sjuu (葉野菜), buu (苧麻), C 型の sizzja (砂糖黍), funuu (蜜柑), goora (苦瓜), rakkjoo (辣韭), zimami (ピーナツ), tagisi (イチゴ), paNdama (水前寺菜), sjafuna (長命草), uikjoo (ウイキョウ) などの語についても, それらを先頭にした修飾構造体の韻律型を観察した。しかし紙面の都合上, これらの韻律型の報告は本稿では省略する。

律語全体が H 音調となって終わる。したがってそれに別の文節や修飾構造体を後続させると、その後続させた文節や修飾構造体は（直前の高いピッチを引き継いで）高く開始することが期待される。したがってその位置に修飾構造体を持ってくると、(21) と同じような韻律型が出現するのではないかという予測がたてられた。

そこで調査では、C 型で開始する修飾構造体に A 型、B 型、C 型の語から開始する修飾構造体を後続させた文を作成して、それらを発話してもらった。具体的には C 型の *sibuL* (冬瓜) と *buugi* (砂糖黍) を先頭にして、たとえば「冬瓜の畑も～の畑もない *sibuL nu paru mai ~ nu paru mai neen*」のような文を作成し、～の部分に A 型の「唐辛子、胡麻」、B 型の「麦、キャベツ」、C 型の「砂糖黍、冬瓜」という語を入れて発話してもらった。以下はその韻律型を示す。

(23) 多良間方言の韻律型（修飾構造体が連なる場合）

- | | | | | |
|----|-----|--|---|----------------|
| a. | C+A | ([<i>sibuL</i>] <u><i>nu</i></u>) (<i>paru</i>) ([<i>mai</i>] | (<i>kuusju</i> <u><i>nu</i></u>) (<i>pa</i>] <i>ru</i>) (<i>mai</i>) … | 冬瓜の畑も唐辛子の畑も… |
| | | ([<i>buugi</i>] <u><i>nu</i></u>) (<i>paru</i>) ([<i>mai</i>] | (<i>guma</i> <u><i>nu</i></u>) (<i>pa</i>] <i>ru</i>) (<i>mai</i>) … | 砂糖黍の畑も胡麻の畑も… |
| b. | C+B | ([<i>sibuL</i>] <u><i>nu</i></u>) (<i>paru</i>) ([<i>mai</i>] | (<i>mugi</i> <u><i>nu</i></u>) (<i>pa</i>] <i>ru</i>) (<i>mai</i>) … | 冬瓜の畑も麦の畑も… |
| | | ([<i>buugi</i>] <u><i>nu</i></u>) (<i>paru</i>) ([<i>mai</i>] | (<i>tamana</i> <u><i>nu</i></u>) (<i>pa</i>] <i>ru</i>) (<i>mai</i>) … | 砂糖黍の畑もキャベツの畑も… |
| c. | C+C | ([<i>sibuL</i>] <u><i>nu</i></u>) (<i>paru</i>) ([<i>mai</i>] | (<i>buugi</i>] <u><i>nu</i></u>) (<i>paru</i>) ([<i>mai</i>] … | 冬瓜の畑も砂糖黍の畑も… |
| | | ([<i>buugi</i>] <u><i>nu</i></u>) (<i>paru</i>) ([<i>mai</i>] | (<i>sibuL</i>] <u><i>nu</i></u>) (<i>paru</i>) ([<i>mai</i>] … | 砂糖黍の畑も冬瓜の畑も… |

予測した通り、(23) の 2つ目の修飾構造体に見られる A 型、B 型、C 型の示す韻律型は、それぞれ (21) に示したイントネーション句の冒頭にある修飾構造体と同じ韻律型で実現した。

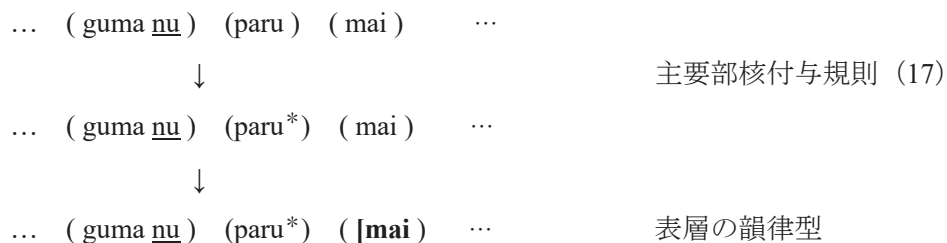
これに対し (21a) や (22a) の例では、A 型の語から開始する修飾構造体の最後が L 音調で終わっていることが分かる。そのため A 型で開始する修飾構造体に別の修飾構造体を後続させた場合には、その後続の修飾構造体は、直前の文節の L 音調を引き継いで、低いピッチで開始することが予想された。この低いピッチで開始する修飾構造体がどのような韻律型で出現するかについても、本調査では検討・確認した。以下は A 型の *kuusju* (唐辛子) を先頭にして、「唐辛子の畑も～の畑もない *kuusju nu paru mai ~ nu paru mai neen*」という文を作成し、～の部分に A 型の「胡麻」、B 型の「麦、キャベツ」、C 型の「砂糖黍、冬瓜」を入れて発話してもらった場合に得られた韻律型である。

(24) 多良間方言の韻律型（修飾構造体が連なる場合）

- a. A+A ([**kuusju nu**]) (**pa**] ru) (mai) (guma **nu**) (paru) (**[mai]**) …
唐辛子の畑も胡麻の畑も…
- b. A+B ([**kuusju nu**]) (**pa**] ru) (mai) (mugi **nu**) (paru) (**[mai]**) …
唐辛子の畑も麦の畑も…
([**kuusju nu**]) (**pa**] ru) (mai) (tamana **nu**) (paru) (**[mai]**) …
唐辛子の畑もキャベツの畑も…
- c. A+C ([**kuusju nu**]) (**pa**] ru) (mai) (buugi **nu**) (**[pa**] ru) (mai) …
唐辛子の畑も砂糖黍の畑も…
([**kuusju nu**]) (**pa**] ru) (mai) (sibuL **nu**) (**[pa**] ru) (mai) …
唐辛子の畑も冬瓜の畑も…

(24) の 2 つ目の修飾構造体に見られる A 型, B 型, C 型の韻律型は, イントネーション句の最初に置かれた修飾構造体の示す韻律型 (21) とは異なる韻律型で出現している。しかしこれらの韻律型も, (17) の主要部核付与規則を想定することによって説明することが可能である。たとえば (24a) の「唐辛子の畑も胡麻の畑も…」の 2 つ目の修飾構造体「胡麻の畑も…」の場合, 次のようなプロセスを経て, その最後の韻律語 (mai の部分) 全体が高く実現することが予測できる。

(25) 「唐辛子の畑も胡麻の畑も…」の 2 つ目の修飾構造体の韻律型の派生プロセス



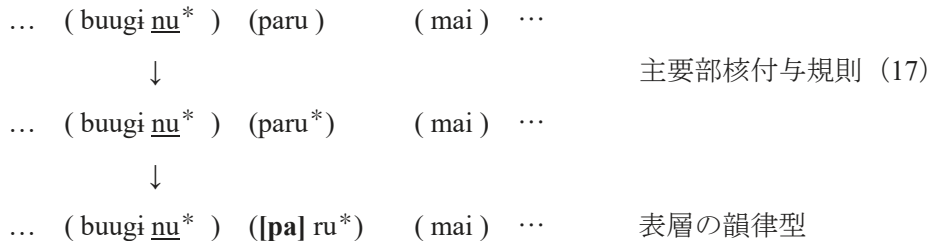
その修飾構造体の 2 つ目の韻律語である「paru 畑」は主要部なので, (17) の規則によって新たに核が付与され, その位置でピッチ変動が生じる。この構造の最後の韻律語である (mai) に出現する H 音調は, そのために生じたと説明することができる。

さて, (24c) の「唐辛子の畑も砂糖黍の畑も…」, 「唐辛子の畑も冬瓜の畑も…」の示す韻律型は注目に値する。その 2 つ目の修飾構造体「…砂糖黍の畑も…」, 「…冬瓜の畑も…」内部の 2 つ目の韻律語「paru 畑」は, ([pa] ru) のように, その最初のモーラだけが高くなっているからである。しかしその理由も, (17) の主要部核付与規則によって説明が可能である。

(8) に記述したように, C 型の語である buugi や sibuL は, その本来の核 (*) がその語から開始する修飾構造体の最初の韻律語内に置かれる。さらにこの構造体に (17) の主要部核付与規則が適用して当該の構造体の 2 つ目の韻律語である (paru) の部分に核が付与されると, その結

果、そこには2つの核が、連続した2つの韻律語にそれぞれ出現することになる。そうすると次のようなプロセスを経て、最終的に高い音調は2つ目の韻律語である *paru* の語頭モーラだけに実現して終わることになる。

(26) 「唐辛子の畑も砂糖黍の畑も…」の2つ目の修飾構造体の韻律型の派生プロセス



以上のように、属格接語 *nu* を1つだけ内部に含む「名詞1 *nu* 名詞2」構造体の韻律型については、(17)の主要部核付与規則によって、そのすべてのピッチ変動（下降と上昇）の出現を説明することができるかと判断された。

4.2 「名詞1 *nu* 名詞2 *nu* 名詞3」構造体の検討

次に、属格接語 *nu* をその内部に2つ含む「名詞1 *nu* 名詞2 *nu* 名詞3」のような修飾構造体の韻律型を検討してみよう。結論から先に述べれば、このような構造体では、(17)の規則を想定するだけでは、そのピッチ変動（下降と上昇）のすべてを説明することはできない。

以下は、「～の畑の東から来た ～*nu paru nu agaL kara kitaL*」という文中で発話してもらった際のA型、B型、C型の韻律型を示している。このうち「*agaL 東*」はA型の語¹³である。

(27) 多良間方言の修飾構造体の韻律型¹⁴

- | | | |
|----|--|---------------|
| a. | A ([guma <u>nu</u>] (paru] <u>nu</u>) (agaL) ([kara) ... | 胡麻の畑の東から... |
| | A ([kuusju <u>nu</u>] (paru] <u>nu</u>) (agaL) ([kara) ... | 唐辛子の畑の東から... |
| b. | B ([mugi <u>nu</u>] (paru] <u>nu</u>) (agaL) ([kara) ... | 麦の畑の東から... |
| | B ([tamana <u>nu</u>] (paru] <u>nu</u>) (agaL) ([kara) ... | キャベツの畑の東から... |
| c. | C ([buugi] <u>nu</u>) (paru] <u>nu</u>) ([aga] L) (kara) ... | 砂糖黍の畑の東から... |
| | C ([sibuL] <u>nu</u>) (paru] <u>nu</u>) ([aga] L) (kara) ... | 冬瓜の畑の東から... |

¹³ [agaL mai ... (東も～), 渡久山・セリック (2020: 38)

¹⁴ *paru* (畑) はC型なので(渡久山・セリック 2020: 384), 一見したところ, これらの例の2つ目の韻律語には *paru* の本来持つ韻律特徴が実現しているかのように見えるかもしれない。しかし, (18a) の ([jaroo nu] (paa] nu) (sjaki) ([kara) ... (テリハボクの葉の先から...) に典型的に見られるように, 同じ部分にA型の語(この場合は「葉」)を持ってきても, まったく同じような韻律型が観察される。この点から見て, (27) の例の2つ目の韻律語に観察される下降(あるいは後続の韻律語に見られる上昇)は, *paru* の持つ語彙的特徴によって生じたものではないことが明らかである。

まず (27a) と、(27b) の A 型および B 型の語から開始する修飾構造体に現れる韻律型について検討してみよう。これらの韻律型ではいずれも、その最後の韻律語 (*kara* の部分) 全体が高く実現していることが分かる。従来の記述報告では、属格接語 *nu* をその内部に 2 つ含む「名詞 1 *nu* 名詞 2 *nu* 名詞 3」のような修飾構造体においては、その最後の韻律語全体が高く実現するのは B 型と C 型の語から開始するものだけであった。しかし (27a) の例は、A 型の語から開始する修飾構造体にも同様な現象が見られることを示している。すでに本稿の (18) の例に関連して述べたように、修飾構造体の最後の韻律語全体を高く実現させるという特徴は、けっして B 型と C 型の語から開始する修飾構造体に限って現れるわけではないことが、このデータからも確認できる¹⁵。

さて、これら (27a) と (27b) の修飾構造体の最後の韻律語に見られる H 音調も、(17) の規則によって説明可能である。この最後の韻律語 (*kara* の部分) に出現する H 音調は、主要部であるその直前の韻律語 (*agaL* の部分) にあらたに核が付与されたために生じた¹⁶、と考えることができるからである。たとえば (27a) の最後の韻律語 (この場合は *kara* の部分) が、(**[guma nu]** (**[paru nu]**) (*agaL*)) (**[kara]**) … のように高く実現することは、その *kara* の直前の語「*agaL* 東」が主要部なので、(17) の規則によってその部分に核が付与されたと考えれば説明できる。

それではこれら (27a) と (27b) の文節の 2 つ目の韻律語 (*paru nu* の部分) に出現するピッチ変動 (この場合は下降) は、一体どのような原因で生じたのだろうか。そもそも「*paru* 畑」はこの修飾構造体の主要部ではないので、この (27a,b) に出現する下降は、(17) の主要部核付与規則によって導き出すことはできない。

このうち (27b) の例、すなわち B 型から出現する韻律型 (**[mugi nu]** (**[paru nu]**) (*agaL*)) (**[kara]**) … の 2 つ目の韻律語に出現する下降については、B 型の本来持つ語彙的な特徴がここに出現したと仮定することによって説明が可能かもしれない。すでに (8d) に明示したように、B 型の語から開始する文節はその 2 つ目の韻律語内に核が置かれることになっている。したがって (27b) の 2 つ目の韻律語である (*paru nu*) の部分に出現する下降は、B 型の語「*mugi*」や「*kyabetsu tamana*」の本来持っている韻律特徴が、修飾構造体においても出現したと考えることによって説明が可能だろう。

これに対して A 型から開始する修飾構造体に出現する下降には、そのような説明を与えることができない。たとえば (27a) の (**[guma nu]** (**[paru nu]**) (*agaL*)) (**[kara]**) … の 2 つ目の韻律語 (*paru nu* の部分) になぜピッチ下降が出現するのかについては、本稿でここまで論じてきたような記述では予測できないのである。

さて、(27) の韻律型の中でも特に注目に値するのは、(27c) の C 型の示す韻律型であろう。実は調査を行う前に、本稿の (18c) に挙げたような韻律型の情報をもとに、あらかじめ出現することを予測していた韻律型は ×(**[buugi nu]** (**[paru nu]**) (*agaL*)) (**[kara]**) … のようなものだった。しかし

¹⁵ すでに見てきた (18) や (20) の場合にも、この (27) と同様、A 型の語から開始する文節の最後の韻律語全体が H 音調で実現するような韻律型が観察されている。

¹⁶ 「*agaL* 東」は A 型なので、文節内部にピッチ変動を生じさせないはずの語である。したがってこの H 音調は、「東」と言う語の本来持っている韻律特徴によって生じたのではない。

予測に反し、実際は (27c) に挙げた ([buugi] nu) (paru nu) ([aga] L) (kara) … のような韻律型が観察されたのである。この (27c) の3つ目の韻律語である「agaL 東」の部分に出現するピッチ変動(「上昇」と「下降」)は、いったいどのような原因によって生じたのであろうか¹⁷。

まず (27c) の ([buugi] nu) (paru nu) ([aga] L) (kara) … は、その最後の韻律語 (kara) の直前に急激なピッチ変動(この場合は下降)が出現している。このように、韻律語である「agaL 東」が ([aga] L) のように最後のモーラのピッチを下げて終わることは、(17) の主要部核付与規則によって説明可能であろう。「東」という語はこの修飾構造体の主要部なので、(17) の規則の影響を受けてその最終モーラに核が付与される。そうすると、当該の語の最終モーラに L 音調が出現することが予測できるからである。

これに対して当該の語が ([aga] L) のように高く開始するのがなぜなのかについては、これまでの先行研究の記述では説明がつかない。

これを説明するために本稿では、この (27) のような修飾構造体は、2つのレベルの階層的な韻律上のまとまり(これを以下サイクルと呼ぶ)から成る韻律構造を形成すると想定する。そして(17) の規則は、その2つのサイクルにそれぞれ適用する、と仮定するのである。

この韻律上のまとまり(サイクル)を、本稿では仮に < > という記号で囲って示すことにする。そして (27) のような構造体は、ひとつの < > の内部にさらに別の < > が埋め込まれているような階層的な韻律構造を成していると想定する。以下、ここでは仮に、このうちのより小さい(下位の)サイクルを「サイクル1」(以下 < >₁ のように示す)と呼び、大きい(上位の)ものを「サイクル2」(以下 < >₂ のように示す)と呼ぶことにする。

そうすると、(27) に示した修飾構造体には、たとえば次の (28) に示すような韻律構造が想定される。ここでは代表としてA型とC型のみを挙げる。

(28) 「胡麻の畑の東から…」, 「砂糖黍の畑の東から…」の韻律構造(仮説)

A << (guma nu) (paru nu) >₁ (agaL) >₂ (kara)

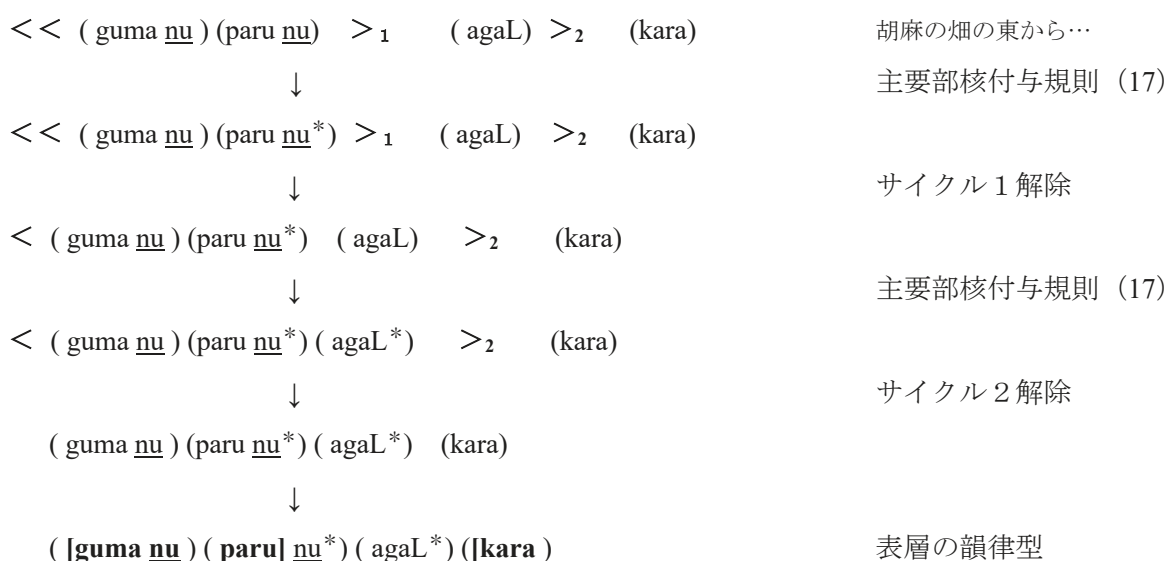
C << (buugi nu*) (paru nu) >₁ (agaL) >₂ (kara)

(17) の主要部核付与規則は、これらの韻律構造のサイクル1とサイクル2にそれぞれ適用し、その適用は下位のサイクル(すなわちサイクル1)のほうから開始して、上位のサイクル(すなわちサイクル2)へと順次行われる、と考えるのである。そして上位のサイクルにおいて(17)が適用する段階では、下位のサイクルはすでに解除されている、と想定するのである。

したがって、たとえば (27a) の ([guma nu) (paru nu) (agaL) (kara) … は、次の (29) のような派生の過程を経て、現実のような韻律型になると考えられる。

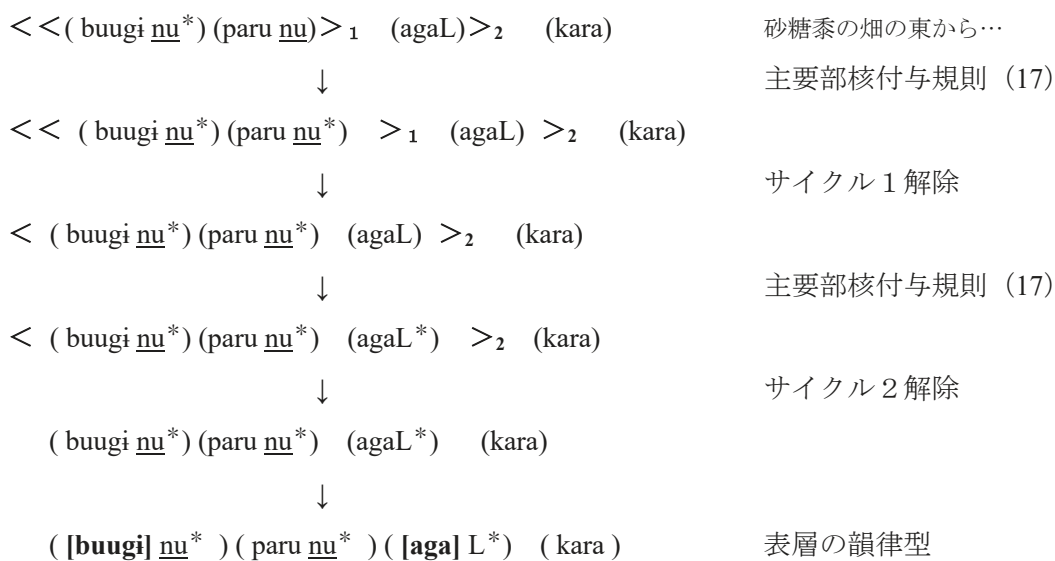
¹⁷ 注16にも述べたように agaL (東) は A 型の語であるので、このピッチ変動は「東」と言う語の本来持っている韻律特徴によってもたらされたのではないことは明らかである。

(29) 「胡麻の畑の東から…」の韻律型の派生プロセス



同様に (27c) の $([\text{buugi}] \underline{\text{nu}}) (\text{paru } \underline{\text{nu}}) ([\text{aga}] \text{L}) (\text{kara}) \dots$ には、次の (30) のような派生のプロセスが想定される。

(30) 「砂糖黍の畑の東から…」の韻律型の派生プロセス



このように考えることで、(27c) の主要部の「agaL 東」が $([\text{aga}] \text{L})$ のように高く開始することを説明することができる。

以上のような仮説の妥当性を検証するために、さらに属格接語 nu を連ねた長い修飾構造体を検討してみよう。

4.3 「名詞1 nu 名詞2 nu 名詞3 nu 名詞4」構造体の検討

今回の調査では、4.2 節で扱った修飾構造体に、さらにもうひとつ属格接語と名詞を付け加えて、

「名詞 1 nu 名詞 2 nu 名詞 3 nu 名詞 4」のような修飾構造体を作り、それから開始する文を発話してもらった。次の (31) に挙げた例は、「～の畑の東の家から来た ～nu paru nu agaL nu jaa kara kitaL」という文の中で発話してもらった際に出現した韻律型である¹⁸。ちなみに「jaa 家(小屋)」は B 型 ([jaa ma]i… 家も…) の語である。ここでも、特に (31c) の示す C 型の韻律型が注目値する。

(31) 多良間方言の修飾構造体の韻律型¹⁹

- a. A ([kuusju nu] (paru nu) (agaL nu) (jaa) ([kara] … 唐辛子の畑の東の家から…
- b. B ([mugi nu] (paru nu) (agaL nu) (jaa) ([kara] … 麦の畑の東の家から…
- c. C ([buugi nu] (paru nu) ([agaL nu] (ja) a) (kara) … 砂糖黍の畑の東の家から…

同様に、次の例は「～の畑の東の家へ行った ～nu paru nu agaL nu jaa Nkee iki」という文の中の～の部分に A 型, B 型, C 型の語を入れて発話してもらった際に出現した韻律型を示している。

(32) 多良間方言の修飾構造体の韻律型

- a. A ([kuusju nu] (paru nu) (agaL nu) (jaa N) ([kee] … 唐辛子の畑の東の家へ…
- b. B ([mugi nu] (paru nu) (agal nu) (jaa N) ([kee] … 麦の畑の東の家へ…
- c. C ([buugi nu] (paru nu) ([agaL nu] (jaa) N) (kee) … 砂糖黍の畑の東の家へ…

前節の (27c) で見たように、これら (31c) や (32c) の例でも、C 型はその 3 つ目の韻律語 (この場合は「agaL nu 東の」) の直前に上昇が生じて、[agaL nu… のように高いピッチで開始していることが分かる。

さて、もしこれらにも前節で見てきた (30) と (31) と同じような韻律構造を仮定するとすれば、たとえば次の (33) に示すような韻律構造が想定される。ここでは代表として A 型と C 型の

¹⁸ 調査では、3 つ目の韻律語に agaL (東) を含む (31) の構造体の韻律型の妥当性を検証するために、それを他の名詞 mookaa (前), tunaL (隣) に置き換え、「～の畑の前(隣)の家から来た。」のような構造体を作って発話してもらった。その結果、以下の (a), (b) に見られるように、(31) と同様な韻律型の実現が観察された。なお、mookaa (前) も tunaL (隣) も A 型の語である。

- (a) A ([akana nu] (paru nu) (mookaa nu) (jaa) ([kara] … 紫蘇の畑の前の家から…
- B ([tamana nu] (paru nu) (mookaa nu) (jaa) ([kara] … キャベツの畑の前の家から…
- C ([upuni] nu) (paru nu) ([mookaa nu] (ja) a) (kara) … 大根の畑の前の家から…
- (b) A ([akana nu] (paru nu) (tunaL nu) (jaa) ([kara] … 紫蘇の畑の隣の家から…
- B ([tamana nu] (paru nu) (tunaL nu) (jaa) ([kara] … キャベツの畑の隣の家から…
- C ([upuni] nu) (paru nu) ([tunaL nu] (ja) a) (kara) … 大根の畑の隣の家から…

¹⁹ 3 つ目の韻律語を、「agaL 東」のような A 型の語ではなく、C 型の「naka 中」という語に変えて、「～の畑の中の家から来た ～nu paru nu naka nu jaa kara kitaL」のような文の中で発話してもらった場合に出現した韻律型は、次のようになる。

- A ([akana nu] (paru nu) (naka nu) ([ja] a) (kara) … 紫蘇の畑の中の家から…
- B ([tamana nu] (paru nu) (naka nu) ([ja] a) (kara) … キャベツの畑の中の家から…
- C ([upuni] nu) (paru nu) ([naka nu] (jaa) ([kara] … 大根の畑の中の家から…

みを挙げる。

(33) 「唐辛子の畑の東の家から…」 「砂糖黍の畑の東の家から…」 の韻律構造 (暫定的仮説)

A <<< (kuusju nu) (paru nu) >₁ (agaL nu) >₂ (jaa) >₃ (kara)

C <<< (buugi nu^{*}) (paru nu) >₁ (agaL nu) >₂ (jaa) >₃ (kara)

そして、もし (17) の主要部核付与規則が、(29)、(30) で示したように、これらの韻律構造の下位のサイクルから上位のサイクルへと順次適用すると仮定するならば、最終的に、誤った韻律型が派生されてしまう。

たとえば (33) の A 型の構造には次のような派生過程が想定され、その結果、×([kuusju nu] (paru] nu) (agaL nu)([ja] a) (kara) というような、(31) に示した現実の韻律型とは異なる韻律型が生み出されてしまう。

(34) 「唐辛子の畑の東の家から…」 の韻律型の派生プロセス

<<< (kuusju nu) (paru nu) >₁ (agaL nu) >₂ (jaa) >₃ (kara)

↓

主要部核付与規則 (17)

<<< (kuusju nu) (paru nu^{*}) >₁ (agaL nu) >₂ (jaa) >₃ (kara)

↓

サイクル 1 解除

<< (kuusju nu) (paru nu^{*}) (agaL nu) >₂ (jaa) >₃ (kara)

↓

主要部核付与規則 (17)

<< (kuusju nu) (paru nu^{*}) (agaL nu^{*}) >₂ (jaa) >₃ (kara)

↓

サイクル 2 解除

< (kuusju nu) (paru nu^{*}) (agaL nu^{*}) (jaa) >₃ (kara)

↓

主要部核付与規則 (17)

< (kuusju nu) (paru nu^{*}) (agaL nu^{*}) (jaa^{*}) >₃ (kara)

↓

サイクル 3 解除

(kuusju nu) (paru nu^{*}) (agaL nu^{*}) (jaa^{*}) (kara)

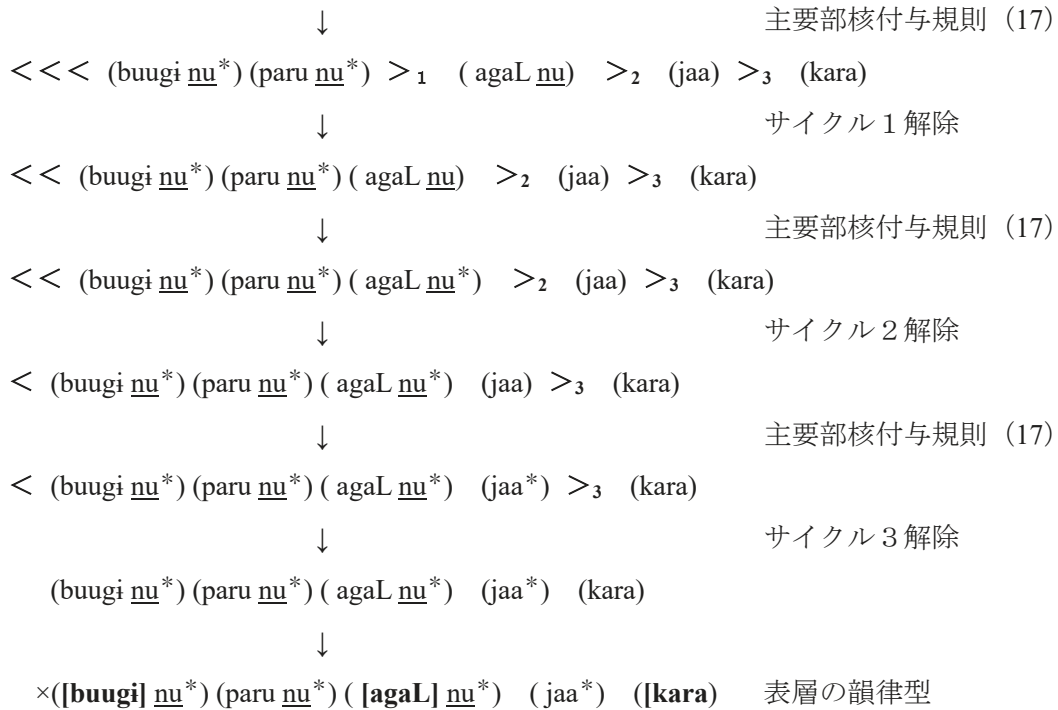
↓

×([kuusju nu] (paru] nu^{*}) (agaL nu^{*}) ([ja] a^{*}) (kara) 表層の韻律型

同様に (33) の C 型の構造に、もし以下のような派生プロセスが想定されるとすれば、その結果、×([buugi] nu) (paru nu) ([agaL] nu) (jaa) ([kara]) のような、(31) に示した実際の韻律型とは異なる韻律型の派生が予測されてしまうことになる。

(35) 「砂糖黍の畑の東の家から…」 の韻律型の派生プロセス

<<< (buugi nu^{*}) (paru nu) >₁ (agaL nu) >₂ (jaa) >₃ (kara)



このような誤った韻律型が生じないことを説明するため、本稿では以下のような仮説を提示したい。すなわち多良間方言では、「名詞1 nu 名詞2 nu 名詞3 nu 名詞4」のような4つの要素からなる構造体は、「名詞1 nu 名詞2 nu」と「名詞3 nu 名詞4」のような、2つの大きな韻律上の単位に区切れ、(17)の規則はその2つの韻律単位にそれぞれ適用する、と仮定するのである。したがって本稿では、(33)の代わりに、次の(36)のような韻律構造を、これらの修飾構造体に想定する。

(36) 「唐辛子の畑の東の家から…」 「砂糖黍の畑の東の家から…」 の韻律構造 (本稿の仮説)

- A < (kuusju nu) (paru nu) > < (agaL nu) (jaa) > (kara)
 C < (buugi nu*) (paru nu) > < (agaL nu) (jaa) > (kara)

そうすると、(36)のA型の語から開始する構造体は、次のようなプロセスを経て、(31a)に示したような韻律型 ([kuusju nu) (paru nu) (agaL nu)(jaa) ([kara])… となって出現すると想定される。

(37) 「唐辛子の畑の東の家から…」 の韻律型の派生プロセス

- | | |
|--|---------------|
| < (kuusju <u>nu</u>) (paru <u>nu</u>) > < (agaL <u>nu</u>) (jaa) > (kara) | 唐辛子の畑の東の家から… |
| ↓ | 主要部核付与規則 (17) |
| < (kuusju <u>nu</u>) (paru <u>nu</u> *) > < (agaL <u>nu</u>) (jaa*) > (kara) | |
| ↓ | < >の解除 |
| (kuusju <u>nu</u>) (paru <u>nu</u> *) (agaL <u>nu</u>) (jaa*) (kara) | |

↓

([kuusju nu]) (paru nu*) (agaL nu) (jaa*) ([kara]) 表層の韻律型

同様に、(31c) の C 型の語から開始する構造体の ([buugi] nu) (paru nu) ([aga L nu] (ja] a) (kara) … という韻律型は、次のようなプロセスを経て、現状のような韻律型となって出現することになる。

(38) 「砂糖黍の畑の東の家から…」の韻律型の派生プロセス

< (buugi nu*) (paru nu) > < (agaL nu) (jaa) > (kara) 砂糖黍の畑の東の家から…

↓ 主要部核付与規則 (17)

< (buugi nu*) (paru nu*) > < (agaL nu) (jaa*) > (kara)

↓ < >の解除

(buugi nu*) (paru nu*) (agaL nu) (jaa*) (kara)

↓

([buugi] nu*) (paru nu*) ([agaL nu] (ja] a*) (kara) 表層の韻律型

以上のような仮説の妥当性については、引き続き検討が必要である。しかし少なくとも、このように考えれば (31) や (32) のような韻律型の出現を正しく予測でき、同時に (34) や (35) のような韻律型が出現しないことも、説明することができる。

ところで、(36) に挙げたような韻律構造の形成には、Kubozono (1988)、窪菌 (1995) が標準語において指摘した韻律構造の再構成の現象が、関与しているのではないかと想定される。標準語では、属格接語「ノ」によって平板型の名詞が 3 つ連続し、しかもそれが左枝分かれの構造を持つ場合には、全体が融合してひとつの韻律単位にまとまる傾向を示す。それに対し、その要素が 4 つになると、それがあたかも「2+2」のような 2 つの固まりに分離したような韻律型となって現れることが指摘されている (窪菌 1995: 113-116)。

たとえば窪菌 (1995) によれば、属格接語「ノ」によって連結した平板型の名詞を内部に 3 つ含む (39a) のような構造では、その 3 つの要素が融合してひとつにまとまり、ナ[オミノ オイノ ヨメ のように、句全体が平板の韻律型となってしまう。ところがその構成要素が 4 つになると、「ナ[オミノ オイノ」と「ヨ[メノナマエ」のように、それがあたかも「2+2」のような 2 つの韻律的な固まりに分断したような様相を示す。すなわち (39b) に見られるように、「直美の甥の」と「嫁の名前」の間でいったんその韻律型が途切れ、その結果「嫁の」の出だし部分に新たな句の開始を示す L 音調が出現するのである。

(39) 標準語の韻律型 (その 1) — 平板型の文節が連続した場合 (窪菌 1995: 114)

- a. ナ[オミノ オイノ ヨメ (直美の甥の嫁)
- b. ナ[オミノ オイノ ヨ[メノナマエ (直美の甥の嫁の名前)

標準語ではその構成要素が起伏型の語から成る左枝分かれ構造の場合にも、似たような現象が観察されている（窪菌 1995: 115）。次の (40a) のように構成要素が3つから成る場合には、いわゆるダウンステップの現象が観察され、「ナ]オコガ ア↓ンダ セーター」のように、それぞれの語の核の位置でピッチが連続的に下降していく。したがって (40a) では、全体にわたって3段階のピッチ下降が句の中に出現することになる。これに対し、(40b) のように構成要素が4つになると、4段階のピッチ下降はそこに出現しない。その代わりに、「直子が編んだ」と「セーターのデザイン」の間でいったん韻律型が途切れ、後者の出だし部分（この場合は「セーター」の部分）で、ピッチが再上昇するような現象が起こるのである。

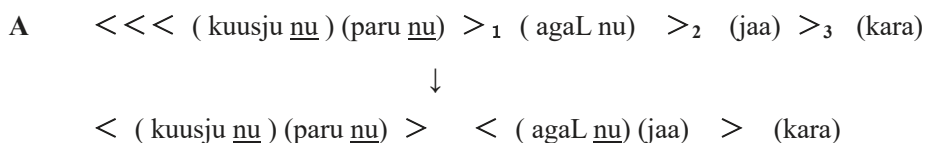
(40) 標準語の韻律型（その2）一起伏型の文節が連続した場合（窪菌 1995: 115）

- a. [ナ] オコガ ア↓ンダ セーター (直子が編んだセーター)
 b. [ナ] オコガ ア↓ンダ [セ]ーターのデザイン (直子が編んだセーターのデザイン)

すなわち、句を構成する要素が4つになると、あたかもそれが「2+2」の2つの固まりに分断されたような韻律型が出現するということが、標準語のプロソディーには観察されている。

本稿では、これと同様な現象が多良間方言の修飾構造体にも生じた、とする仮説を提案する。すなわち多良間方言でも、「名詞1 nu 名詞2 nu 名詞3 nu 名詞4」のように属格接語でつながる要素が4つになった場合に、そこに韻律構造の組み換えが生じた、と推定するのである。具体的には、以下の (41) に示すような韻律構造の組み換えが、この方言に生じたことが想定される（紙面の都合上、A型の語から開始する修飾構造体のみ以下に示す）。

(41) 修飾構造体「唐辛子の畑の東の家から…」における韻律構造の再構築



本稿ではこれを、「韻律構造の再構築」と仮に呼ぶこととしたい。この韻律構造の再構築の現象が、多良間方言においてどの程度一般的に見られるものなのかについては、今後の調査で検討していく必要がある。この課題のためには、属格接語 nu を介して名詞をいくつも連ねた修飾構造体のデータ²⁰を、さらに蓄積して検討することが求められている。

²⁰ 属格接語 nu を介した修飾構造体ばかりではなく、「泣く人」や「低い木」のような連体修飾の要素を連ねた修飾構造体においても、同様な検討を行っていく必要がある。

4.4 今後の課題—A 型の語から開始する修飾構造体のピッチ変動について

さて、これまで見てきた多良間方言の修飾構造体の中でも、この節では、特に A 型の語から開始する修飾構造体の示す韻律型に焦点を当て、その調査結果を検討したい。次の (42a, b, c) は、本稿ですで見えてきた韻律型 (27), (31), (32) の韻律型の中から、A 型の語から開始するものだけを抜粋し、示したものである。

(42) 多良間方言の修飾構造体の韻律型 (A 型の語から開始する場合)

- a. A ([guma nu) (paru nu) (agaL) ([kara) … 胡麻の畑の東から… (27a)
- b. A ([kuusju nu) (paru nu) (agaL nu) (jaa) ([kara) … 唐辛子の畑の東の家から… (31a)
- c. A ([kuusju nu) (paru nu) (agaL nu) (jaa N) ([kee) … 唐辛子の畑の東の家へ… (32a)

これら A 型の語から開始する修飾構造体の韻律型にはすべて、ピッチ変動が 2 カ所生じていることが分かる。そのうちの最初のもの (下降) は当該の構造体の 2 つ目の韻律語 (この場合は paru nu の部分) に出現し、その 2 つ目のもの (上昇) は、その構造体の最後の韻律語 (この場合は kara や Nkee の kee の部分) の直前に出現している。

これに対して五十嵐 (2015: 39) の提示したデータの中には、その下降位置が修飾構造体内の 3 つ目以降の韻律語に出現する A 型の例が報告されている。本稿の (12) のうち、A 型の語から開始する例として示したものがそれに当たる²¹。(12) の A 型の例を、以下の (43) に再掲する。

(43) 多良間方言の修飾構造体の韻律型 (A 型の語から開始する場合)

- ([kuba) (gii nu) (paa nu) (paN] ta) (mai) … クバ木の葉の先端も… (12)

この五十嵐 (2015: 39) の提示した情報をもとにして、今回の調査前に出現することを予測していた A 型の韻律型は、たとえば次のようなものであった。

(44) 多良間方言の修飾構造体の韻律型 (A 型の語から開始する場合)

- a. A ×([guma nu) (paru nu) (aga] L) (kara) … 胡麻の畑の東から…
- b. A ×([kuusju nu) (paru nu) (agaL nu) (ja] a) (kara) … 唐辛子の畑の東の家から…
- c. A ×([kuusju) (paru nu) (agaL nu) (jaa] N) (kee) … 唐辛子の畑の東の家へ…

もし主要部核付与規則 (17) が (そしてそのみが)、A 型の語から開始する修飾構造体にも適用したとするならば、そのピッチ変動 (この場合は下降) が、たとえば ×([guma nu) (parnu) (aga]

²¹ すでに論じたように、この A 型の韻律型のピッチ変動 (下降) の出現は、(17) の主要部核付与規則を想定することによって説明できる。すなわちこの韻律語 (paN]ta) の部分に生じているピッチ下降は、当該の修飾構造体の主要部である paNta を含む韻律語に、(17) によってあらたに核が付与されたために生じたと考えられる。

L) (kara) … や ×([kuusju nu] (paru nu) (agaL nu) (ja] a) (kara) … のように、その構造体内部の3つ目や4つ目の韻律語に出現してもおかしくないと思われたからである。

このような予測に反して今回の調査のデータでは、(42)に見られるように、A型の下降は修飾構造体の2つ目の韻律語に固定して出現し、それより後ろに出現することはなかった。つまりそのA型の下降位置は、(42)の ([guma nu] (paru nu) (agaL)([kara) … , ([kuusju nu] (paru nu) (agaL nu)(jaa) ([kara) … , ([kuusju nu] (paru nu) (agaL nu)(jaa N) ([kee) … に見られるように、常に当該の構造体の2つ目の韻律語内部に出現していたのである。

このような多良間方言におけるA型の修飾構造体の示す韻律型の異なりは、いったいどのような要因で生じるのだろうか。

その一つの要因の可能性は、話者による異なりである。(42)に示した修飾構造体の韻律型はすべて、五十嵐(2015)の提示した(43)の発話を提供した話者とは異なる話者から得られたものである。つまり同じ多良間島内でも、(42)の例のように、A型の修飾構造体の下降位置を常に当該の構造体の2つ目の韻律語内に固定して出現させる話者もいる一方で、(43)の例のように、その下降位置を、さらに後ろのほうの韻律語に出現させる話者もいる。このように、A型のピッチ変動(この場合は下降)の位置の違いは、何らかの話者の属性の違いによって決まるという仮説をたててみることができる。仮にそうだとすると、どのような属性がその違いに関与しているのだろうか²²。これについては、今後の調査による詳細な検討を要する。

もう一つの要因として考えられるのは、(42)と(43)の構造上の違いである。これらの修飾構造体はその形態・統語的な構造が完全に同一ではない。(42)に挙げた例は、たとえば ([guma nu] (paru nu) (agaL) ([kara) … のように、すべての構造体が(「胡麻、唐辛子」といった)単純語から開始している。これに対して、(43)の ([kuba] (gii nu) (paa nu) (paN] ta) (mai) … のほうは、「クバ木」のような複合語から開始している。このような構造上の違いが、その韻律型の違いに影響しているのではないかと、という仮説をたててみることができる。この仮説の妥当性も、現時点では不明とせざるをえない。

また、もしこのような構造上の違いがその韻律型の違いに影響しているのであれば、一体なぜ(単純語ではなく)複合語から開始する修飾構造体のほうに、(43)に見られるように、ピッチ変動(下降)の出現位置がその構造体の後ろのほうにずれていく傾向が観察されるのだろうか。

以上のような点に焦点を当てながら、今後さらに修飾構造体のデータを集め、検討する必要がある。

5. まとめ

以上、本稿では多良間方言の修飾構造体のプロソディーについて検討してきた。特に本稿では、「名詞 nu 名詞 nu 名詞 nu 名詞」のように、属格接語 nu を介して名詞がいくつも連結した場合

²² その属性は世代差である可能性もあるし、多良間島内の地域差である可能性もある。ちなみに(43)の韻律型は、いずれも多良間島の塩川出身の昭和10年生まれの話者(男性)から得られたものである。これに対して(42)に挙げられた例は、同島の仲筋出身の昭和28年生まれの話者(男性)から得られた韻律型である。

の修飾構造体の韻律型に関する記述データを提供し、その韻律型がどのような要因によって決定するのかについて、いくつかの仮説を提示した。

本稿では、先行研究の観察・記述結果を受け、主要部核付与規則 (17) を多良間方言に想定し、その規則によって修飾構造体のピッチ変動の出現を説明することを試みた。しかし本稿は、単にこの規則を想定するだけでは、多良間方言の修飾構造体のすべてのピッチ変動を説明できないことも明らかにした。

その問題を解消するために本稿は、これらの修飾構造体に階層的な韻律構造を想定し、(17) の主要部核付与規則は、下位のサイクルから上位のサイクルへと循環的に適用する、とする仮説を提示した。さらに本稿では、その韻律構造には、ある一定の条件のもとに組み換えが起こる、という仮説も提示した。そして、この組み換えを「韻律構造の再構築」と仮称した。

以上のような本稿で提示した仮説は、今後の詳細な検討を必要としている。

また本稿は、多良間島方言の修飾構造体においては、特に A 型の語から開始する構造体において、その内部のピッチ変動（当該の文節からイントネーション句が開始される場合には「下降」）の出現位置に、いくつかの異なるタイプのものが観察されるということを報告した。それらの異なる出現位置はどのような要因によって決まるのかという点も、未だに解明されていない謎である。したがって本稿では、特に A 型の語から開始する修飾構造体に焦点を当てた記述・分析が、今後成される必要があることを論じた。

以上述べてきたことから明らかなように、多良間方言の修飾構造体の韻律型については、依然として未解決の課題が山積している。引き続き調査を行い記述データを蓄積し、検討を行っていくことが求められている。

参考文献

- 青井隼人 (2016) 「南琉球宮古多良間方言の三型アクセント：その特徴と型の中和」『音声研究』20(3): 76-81.
- 青井隼人 (2017) 「南琉球宮古多良間方言における 2 種類のアクセント型の中和」『国立国語研究所論集』13 : 1-23.
- 青井隼人 (2018a) 「南琉球宮古多良間方言におけるピッチ上昇：複数の韻律句が連続する場合のピッチパターンの記述」『国立国語研究所論集』14: 1-27.
- 青井隼人 (2018b) 「南琉球宮古多良間方言のアクセント規則」日本音韻論学会 2018 年度春期研究発表会発表資料 (6 月 22 日) .
- 青井隼人 (2019) 「南琉球宮古多良間方言の欠性的低音調」『音韻研究』22 : 3-10.
- 青井隼人 (2022) 「南琉球宮古語多良間方言における 3 種の音調型実現ドメイン」リンディフォーラム：ウェビナーシリーズ (20) 発表資料 (3 月 22 日) .
- セリック・ケナン (2020) 「南琉球宮古語史」未公開博士論文. 京都大学.
- セリック・ケナン (2021a) 「南琉球宮古多良間方言は四型であって、三型ではない」国立国語研究所第 217 回 NINJAL サロン発表資料 (1 月 21 日) .

- セリック・ケナン (2021b) 「多良間方言の韻律構造: 韻律語の再定義の試み」国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」共同研究会発表資料 (3月14日) .
- セリック・ケナン (2021c) 「下地皆愛方言のアクセント体系に関する予備的報告」『言語記述論集』13: 215-290.
- セリック・ケナン, 青井隼人 (2021a) 「宮古語多良間方言におけるアクセント単位の定義に関する試論」国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」共同研究会発表資料 (12月18日) .
- セリック・ケナン, 青井隼人 (2021b) 「多良間方言の韻律構造の解明に向けて一動詞進行融合形の音調の記述とその分析」『国立国語研究所論集』21: 133-162.
- セリック・ケナン, 青井隼人 (2022) 「南琉球宮古語多良間方言における『名詞+動詞』構造の複合名詞アクセント」窪菌晴夫, 守本真帆 (編)『プロソディー研究の新展開』開拓社 236-257.
- 平山輝男 (編著) (1983) 『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』桜楓社.
- 平山輝男, 大島一郎, 中本正智 (1967) 『琉球先島方言の総合的研究』桜楓社.
- 五十嵐陽介 (2012) 「南琉球宮古語与那覇方言の名詞のアクセント体系: 初期報告」『国立国語研究所共同研究報告 12-02「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」南琉球宮古方言調査報告書』 53-68. 国立国語研究所.
- 五十嵐陽介 (2015) 「南琉球宮古語多良間方言のアクセント型の記述」『比較日本文化学研究』1-42. 広島大学大学院文学研究科総合人間学講座.
- 五十嵐陽介 (2016a) 「南琉球宮古語池間方言・多良間方言の韻律構造」『言語研究』150: 33-57.
- 五十嵐陽介 (2016b) 「名詞の意味が関わるアクセントの合流」『音声研究』20 (3) : 46-65.
- 五十嵐陽介 (2018) 「これからの方言アクセント研究がなすべきこと」日本語学会 2018 年度春季大会シンポジウム発表資料.
- 五十嵐陽介, 田窪行則, 林由華, ペラール トマ, 久保智之 (2012) 「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』16(1): 134-148.
- Igarashi, Yosuke, Yukinori Takubo, Yuka Hayashi and Tomoyuki Kubo. (2018) Tonal neutralization in the Ikema dialect of Miyako Ryukyuan. Kubozono, H and M. Giriko (eds.) *Tonal Change and Neutralization*. Walter de Gruyter Mouton.
- Kubozono, Haruo (1988) The organization of Japanese prosody. Ph.D. dissertation, University of Edinburgh. Tokyo: Kurosio 1993.
- 窪菌晴夫 (1995) 『語形成と音韻構造』くろしお出版.
- 松森晶子 (2010) 「多良間島の3型アクセントと『系列別語彙』」上野善道 監修『日本語研究の12章』 490-503. 明治書院.
- 松森晶子 (2013) 「宮古島における3型アクセント体系の発見—与那覇方言の場合—」『国立国語研究所論集』6: 67-92. 国立国語研究所.
- 松森晶子 (2014) 「多良間島のアクセントを再検討する」『日本女子大学紀要 文学部』63: 13-36.

- 松森晶子 (2015) 「南琉球の三型アクセント体系—その韻律単位に関する考察」『日本女子大学紀要 文学部』 64: 55-92.
- 松森晶子 (2016a) 「多良間島における文のプロソディー—韻律句が連なる場合の音調交替現象について」国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」キックオフワークショップ発表資料 (1月11日) .
- 松森晶子 (2016b) 「声調言語としての宮古祖語—特にその TBU として機能する韻律上の単位について」田窪行則, ジョン ホイットマン, 平子達也 (編)『琉球諸語と古代日本語—日琉祖語の再建にむけて』 pp.145-165. くろしお出版.
- 松森晶子 (2017) 「3 モーラを持つ方言—南琉球宮古島の上地と与那覇の三型体系—」国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」共同研究会発表資料 (6月18日) .
- 松森晶子 (2022) 「宮古諸島における『韻律領域の拡張』と多良間島のプロソディー」国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」共同研究会発表資料 (5月28日) .
- Matsumori, Akiko (2019) A Prosodic Unit, Recursive Structure and Nature of Accent of Miyako Ryukyuan. *The Linguistic Review*. 29 (1): 51-83. De Gruyter Mouton.
- 新田哲夫 (2018a) 「南琉球多良間方言アクセントの下降と上昇」国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」共同研究発表会発表資料 (2月18日) .
- 新田哲夫 (2018b) 「南琉球多良間方言のアクセント低核」国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」共同研究発表会発表資料 (9月17日) .
- 新田哲夫 (2019) 「南琉球多良間方言のアクセントの弁別特徴と名詞句のアクセント」第159回日本言語学会ポスター発表資料 (11月17日) .
- 新田哲夫 (2022) 「南琉球池間方言アクセントの動的音韻解釈」音韻論フェスタ2022 発表資料 (3月7日) .
- 新田哲夫 (2023a) 「南琉球多良間方言アクセントの弁別特徴」『金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇』 15: 1-20.
- 新田哲夫 (2023b) 「南琉球宮古島与那覇方言のアクセント体系と弁別特徴」日本方言研究会第116回研究発表会発表資料 (5月19日) .
- 渡久山春英, セリック・ケナン (2020) 『南琉球宮古語多良間方言辞典』国立国語研究所 学術情報リポジトリ.